行列表示による STEM 像シミュレーション法の開発

森村 隆夫

Simulation of Scanning transmission electron microscope image by Bloch-wave method

by

Takao MORIMURA

In a Bloch-wave-based scanning transmission electron microscope (STEM) image simulation, a framework for calculating the cross section for any incoherent scattering process was formulated by Allen et al. They simulated the HAADF, BSE, EELS and EDX STEM images from the inelastic scattering coefficients. Furthermore, a skilful approach for deriving the excitation amplitude and block diagonalization in the eigenvalue equation were employed to reduce the computing time and memory. In the present work, we extend their scheme to a layer-by-layer representation for application to inhomogeneous crystals that include precipitates and atomic displacement. Calculations for a multi-layer of Si-Sb-Si were performed by multiplying Allen et al.'s block-diagonalized matrices. Electron intensities within the sample and EDX STEM images were calculated at various conditions. From the calculations, 3-dimensional STEM analysis was considered.

Key words : Bloch wave method, STEM, Bethe equation, EDX, HAADF

1. はじめに

近年の走査型透過電子顕微鏡(STEM; Scanning Transmission Electron Microscope)の発展は目覚ま しく、その像解釈のためのシミュレーション法の開発 が切望されている。動力学的回折理論に基づく STEM シミュレーション像はマルチスライス法¹⁾⁻³⁾と Bloch 波法の2つの手法によって計算される。マルチスライ ス法は欠陥構造をもつ試料に対する計算に有効であ る。Bloch 波法は、試料の周期構造を仮定しているた め、完全結晶に対しては非常に有効である。しかし、 試料が欠陥構造をもつ場合には、莫大な計算時間とコ ンピューターの容量が必要となる。

Bloch 波法による HAADF STEM シミュレーションは、 最初、Pennycook らによって行われた^{4),5)}。この手法 は三石ら⁶⁾、山崎ら⁷⁾によって、積層試料に適用され た。彼らは、電子線入射方向に積層する試料に対して、 各層における Bethe 行列の積で波動関数を計算した。 一方、Allenらは EELS、EDX、BSE、HAADF に対する STEM シミュレーションを定式化した^{8),9)}。これらの検 出法に対する散乱断面積の式を統一化し、式中の非弾 性散乱因子のみを変えることで、各検出法による STEM 像の計算を可能にした。また、励起振幅の導出や Bethe 行列のブロック対格化等の計算手法を工夫し、計算時 間や容量を飛躍的に減少させた。

本稿では、Allen らの手法を発展させ、積層試料に 適用する方法^{10),11)}を確立する。この手法を Si-Sb-Si 積層試料に適用し、EDX STEM 像のシミュレーションを 行う。また、計算結果より STEM による 3 次元構造解 析¹²⁾⁻¹⁶⁾について考察する。

2. 計算方法

STEM 像シミュレーションにおける波動関数は、 Schrödinger 方程式を行列表示した Bethe の式

平成23年12月22日受理

物質科学部門(Division of Chemistry and Materials Science)

$$\mathbf{AC} = 2K\mathbf{C}(\lambda^k)_D$$

によって求めることができる。 C は、Bethe 行列 A の 固有ベクトル C_g^k からなる行列、 $(\lambda^k)_D$ は固有値から なる行列を示す。添え字 D は対格化行列を、K は結晶 における平均波数を示す。Findlay らは STEM シミュレ ーションにおける反射を次式のように仮定した⁹⁾。

 $\mathbf{g} = \mathbf{G} + \mathbf{q}_l$.

Gは*N*個の逆格子ベクトル、**q**_{*l*}はBrillouin ゾーン内の*m* 個の連続ベクトルを示す。異なった*l*に対する波動関数は相互作用しないので、*mN×mN*次元のBethe行列はブロック対格化できる。その結果、Bethe 行列は

m 個	σi	V×	N次	元	の音	部分征	亍列	か	らな	ŋ	、 E	Bet	he	のī	式は	t
([A (q	1)]	[0]]		[()] Ύ	[C (q	[₁)]	[0]				[0]			
[0]		$[\mathbf{A}(\mathbf{q}_2)]$		•••			[0] 		[C(q	2)])] `.					
				·												
(•••	$[\mathbf{A}(\mathbf{q}_m)]$		(··· [C		$\mathbb{C}(\mathbf{q}_m)]$			
([C(q	1)]	[0]]		[0]	Y	[λ(q	$[1_1)]_D$		[0]		•••		[0])
= 2K	[0]		[C(q	2)]				[0]	[λ	$({\bf q}_2)$	$]_D$	•••			
- 24					۰.				••				۰.			
(•		[C (q ,	")]人		••		•••		•••	[λ(q _m)]	D,
のよ	うに	こ変	形	でき	る	9) o	S	のた	こめ同	問是	툀を	``	次	式0	つよ	2

な **m** 個の **N×N**次元固有値方程式を解くことに簡略化 できる。

$$[\mathbf{A}(\mathbf{q}_l)][\mathbf{C}(\mathbf{q}_l)] = 2K[\mathbf{C}(\mathbf{q}_l)][\lambda^{\kappa}(\mathbf{q}_l)]_D.$$

これを解くことにより波動関数は

$$\psi(\mathbf{K}, \mathbf{R}, \mathbf{r}_{\perp}, z) = \sum_{l=l,k=1}^{m} \alpha^{l,k} (\mathbf{R}) \psi^{l,k} (\mathbf{K}, \mathbf{r}_{\perp}, z)$$
(1)

で計算できる。ここで、z、 \mathbf{r} .は試料の厚さ方向とそれ に垂直方向の位置を、 \mathbf{R} は照射ビームの中心位置を示 す。励起振幅 $\alpha^{l,k}$ 、Bloch 波 $\psi^{l,k}$ は Allen らによって

$$\alpha^{l,k}(\mathbf{R}) = \sum_{\mathbf{G}} C_{\mathbf{G}}^{k*}(\mathbf{q}_{l}) \exp[-2\pi i (\mathbf{G} + \mathbf{q}_{l}) \cdot \mathbf{R}] T(\mathbf{G} + \mathbf{q}_{l}) \quad (2)$$

$$\psi^{l,k}(\mathbf{K},\mathbf{r}_{\perp},z) = \exp[2\pi i \lambda^{k}(\mathbf{q}_{l})z] \sum_{\mathbf{G}=l}^{N} C_{\mathbf{G}}^{k}(\mathbf{q}_{l}) \exp[2\pi i (\mathbf{G}+\mathbf{q}_{l}) \cdot \mathbf{r}_{\perp}] \quad (3)$$

のように示された⁸⁾。 $T(\mathbf{G}+\mathbf{q}_l)$ はコントラスト伝達関数を示し、

$$T(\mathbf{p}) = O(p) \exp[-i(\pi \Delta f \lambda p^2 + \frac{\pi}{2} C_S \lambda^3 p^4)]$$

となる。ここで c_s は対物レンズの球面収差係数、波長 は $\lambda = 1/K$ 、 Δf はデフォーカス量を示しアンダーフォー カスを負と定義する¹⁷⁾。*O*(*p*)はアパーチャー関数を示す。

(1)式は次式のように**r**.依存項とz依存振幅に分けられる(Darwin 表示)¹⁸⁾。

$$\psi(\mathbf{K}, \mathbf{R}, \mathbf{r}_{\perp}, z) = \sum_{l=1}^{m} \sum_{\mathbf{G}=1}^{N} \varphi^{l, \mathbf{G}}(z) \exp[2\pi i (\mathbf{G} + \mathbf{q}_{l}) \cdot \mathbf{r}_{\perp}].$$

ここで

$$\varphi^{l,\mathbf{G}}(z) = \sum_{k=1}^{N} \alpha^{l,k}(\mathbf{R}) C_{\mathbf{G}}^{k}(\mathbf{q}_{l}) \exp[2\pi i \lambda^{k}(\mathbf{q}_{l})z] \quad (4)$$

(4)式を行列表示すると

$$\boldsymbol{\varphi}(z) = \mathbf{C} \{ \exp[2\pi i \lambda^{K} (\mathbf{q}_{l}) z] \}_{D} \boldsymbol{\alpha}$$

となる。行列 C、 $\{\exp[2\pi i \lambda^k (\mathbf{q}_l)z]\}_D$ の次元は $mN \times mN$ 、

φ(z)、αの次元は mN×1 である。Fig.1 のように結晶
が、異なる相の積層からなる場合、(n-1)番目とn番目
の層間のz依存振幅の境界条件は

$$\boldsymbol{\varphi}_{n-1}(t_{n-1}) = \boldsymbol{\varphi}_n(0) = \mathbf{C}_n \boldsymbol{\alpha}_n, \quad \boldsymbol{\alpha}_n = \mathbf{C}_n^{-1} \boldsymbol{\varphi}_{n-1}(t_{n-1})$$

となる。ここで tnは n番目の層の厚さを示す。これから、(n-1)番目と n番目の層間の z 依存振幅の関係は

$$\begin{split} \boldsymbol{\varphi}_{n}(z_{n}) &= \mathbf{C}_{n} \{ \exp[2\pi i \lambda_{n}^{k}(\mathbf{q}_{l}) z_{n}] \}_{D} \boldsymbol{\alpha}_{n} \\ &= \mathbf{C}_{n} \{ \exp[2\pi i \lambda_{n}^{k}(\mathbf{q}_{l}) z_{n}] \}_{D} \mathbf{C}_{n}^{-1} \boldsymbol{\varphi}_{n-1}(t_{n-1}) \\ &= \mathbf{P}_{n}(z_{n}) \boldsymbol{\varphi}_{n-1}(t_{n-1}) \end{split}$$
(5)

となる。ここで z_n は Fig.1 のように n番目の層の表面 からの深さ、 $\mathbf{P}_n(z_n)$ は散乱行列を示す。ブロック対角 化により、(5)式は



のように部分行列からなる式に変形できる。部分行列



Fig.1 Scheme of the multi-layer sample. t_n and z_n are the *n*-th layer thickness and depth from the *n*-th layer surface, respectively ¹⁰.

$$[\mathbf{C}_{n}(\mathbf{q}_{l})] \, \left\{ \exp[2\pi i \lambda_{n}^{k}(\mathbf{q}_{l})z_{n}] \right\}_{D} \, \left[\mathbf{P}_{n}(z_{n}) \right]_{\mathbf{q}_{l}} \mathcal{O}$$
次元

は $N \times N$ 、 $[\varphi(z_n)]_n$ の次元は $N \times 1$ である。このため問

題を、m 個の N×N 次元行列方程式を解くことに簡略 化できる。n 番目の層における z 依存振幅と励起誤差 は

$$[\boldsymbol{\alpha}_{n}(\mathbf{q}_{l})] = [\mathbf{C}_{n}(\mathbf{q}_{l})]^{-1}[\boldsymbol{\varphi}_{n-1}(t_{n-1})]_{\mathbf{q}_{l}}$$
(7)

となる。ここで、1番目の層の励起振幅 $a_1(\mathbf{q}_l)$ は(2)式 より求める。n番目の層における波動関数は(6)式のz依存振幅 $\varphi_n^{l,\mathbf{G}}(z_n)$ を

 $\psi_{n}(\mathbf{K}, \mathbf{R}, \mathbf{r}_{\perp}, z_{n}) = \sum_{l=1}^{m} \sum_{\mathbf{G}=1}^{N} \varphi_{n}^{l, \mathbf{G}}(z_{n}) \exp[2\pi i (\mathbf{G} + \mathbf{q}_{l}) \cdot \mathbf{r}_{\perp}] \quad (8)$ に代入することによって得られる。

 (6)式は一般的な式で、各層の結晶構造因子について 何ら制限を必要としない。もし試料が均一成分からな り第 n層が変位 τ のみを有する場合、波動関数は非常 に簡単に表せる。この場合、(6)式の散乱行列
[**P**_n(z_n)]_{**q**₁}は TEM の場合¹⁸⁾と同様に
$$\begin{split} & [\exp[2\pi i (\mathbf{G} \cdot \mathbf{\tau}_{n})]_{D}^{-1} [\mathbf{P}_{n}(z_{n})]_{\mathbf{q}_{l}} [\exp(2\pi i \mathbf{G} \cdot \mathbf{\tau}_{n})]_{D} \\ & \& \mathbb{E} \triangleq 換 え れ ば よ い 。 こ こ で 、 対 角 化 行 列 \\ & [\exp(2\pi i \mathbf{G} \cdot \mathbf{\tau}_{n})]_{D} は 第 n 層の変位による結晶構造因子 \\ & odd 相変化を示す。 \end{split}$$

第 **n**層における単位体積当たりの非弾性散乱断面積 は Findlay らによって

$$\sigma_{n}(\mathbf{R},t) = \sum_{l=1}^{m} Tr\{[\mathbf{B}_{n}(\mathbf{q}_{l})][\mathbf{C}_{n}(\mathbf{q}_{l})]^{*T}[\boldsymbol{\mu}_{n}(\mathbf{q}_{l})][\mathbf{C}_{n}(\mathbf{q}_{l})]\}$$
$$+ (1 - \sum_{l=1}^{m} Tr\{[\mathbf{B}_{n}(\mathbf{q}_{l})]^{T}[\mathbf{C}_{n}(\mathbf{q}_{l})]^{T}[\mathbf{C}_{n}(\mathbf{q}_{l})]^{*}\})\boldsymbol{\mu}_{\mathbf{0},\mathbf{0},n}$$
(9)

のように定式化された 9 。ここで、行列 $[\mathbf{B}_{n}(\mathbf{q}_{l})]$ は z

積分干渉項 $B^{k'}(\mathbf{R},t_n)$ からなり

$$B^{kk'}(\mathbf{R},t_n) = \alpha_n^k(\mathbf{R})\alpha_n^{k'*}(\mathbf{R}) \frac{\exp\{2\pi i [\lambda_n^k(\mathbf{q}_l) - \lambda_n^{k'*}(\mathbf{q}_l)]t_n\} - 1}{2\pi i [\lambda_n^k(\mathbf{q}_l) - \lambda_n^{k'*}(\mathbf{q}_l)]t_n}$$

で与えられる。ここで、第 n 層の励起振幅 α_n^k (**R**) は(7) 式より計算される。(9)式の n に関する和は、試料全体 にわたる散乱断面積となり、ADF, BSE, EELS, EDX によ る STEM 像の測定値に対応する。非弾性散乱係数 $\mu_{\mathbf{h},\mathbf{g}}$ か らなる行列 μ を変えるだけで、これらの検出法の種類 を区別して計算することができる。

本研究では、Bethe 行列**A**の非対角要素として、Doyle らによる原子散乱因子¹⁹⁾と Humphreys らによる吸収ポ テンシャル²⁰⁾を用いた。計算に考慮した逆格子ベクト ル**G**、 \mathbf{q}_l の数(*N*, *m*)をそれぞれ 205、53 とした。加速 電圧を 200 kV とした。非弾性散乱に対する原子散乱因 子として過去に報告された理論値を用いた²¹⁾⁻²³⁾.

3. 積層試料への応用

[110]に沿って3層が積層する試料について計算を行 う。第1、第3層をSi、第2層を仮想的なSbとする。 3層とも格子定数5.43Åをもつダイヤモンド構造と仮 定し、層の厚さをそれぞれ45Å、10Å、45Åとする。 それぞれの層間の境界は原子レベルで整合し、歪みが ないと仮定する。

Fig.2に、様々な対物レンズの球面収差係数に対して、 (8)式から計算した入射電子の試料内での強度を示す。 横軸 x は[001]に沿った座標を、縦軸 z は[110]に沿っ た試料表面からの深さを示す。原子コラムは x = 0 と -1.36Åに位置し、これらはダイヤモンド格子中のダン ベル構造を形成する。STEM ビームの中心をx = 0の位 置においた。Si層とSb層の位置を図の右側に示してい る。球面収差係数 $C_{s} = 0.1 \text{ mm}$ (a)、0.01 mm(b)、0.001 mm(c)に対して計算を行った。Schrrzerフォーカスを

$$\Delta f = 1.2 (\lambda C_{\rm S})^{1/2}$$

に従って-190 Å (a)、-60 Å (b)、-19 Å (c)とおき、 最適絞り径を

$$p_{\text{max}} = 1.51 (\lambda^3 C_S)^{-1/4}$$

に従って 0.76 Å⁻¹ (a)、1.35 Å⁻¹ (b)、2.40 Å⁻¹ (c)と おいた。プローブはどの $C_{\rm S}$ でも x=0 の原子コラム位 置に集中している。どの $C_{\rm S}$ でも入射に垂直な方向の分 解能は、ダンベル構造を分離するのに十分である。電 子強度は、Si 層と Sb 層の境界で滑らかにつながってい る。z方向の分解能は $C_{\rm S}$ が減少し、最適絞り径が大き くなるとともに向上している。 $C_{\rm S} = 0.001$ mm (c)でz方向の分解能は 10 Å 程度に達している。

Fig. 3 に、 $C_8 = 0.001 \text{ mm}$ において、様々なデフォー カスに対して計算した試料内の電子強度を示す。STEM ビームの中心を x = 0 Å の位置においた。デフォーカ スを-100 から 0 Å へ変化させると、最大強度を示す深



Fig.2 Calculated electron intensities in the stack composed of Si, Sb and Si layers whose thicknesses are 45, 10 and 45 Å, respectively. The calculations were performed in the spherical aberrations of 0.1 mm (a), 0.01 mm (b) and 0.001 mm (c) with Scherzer focuses and optimal cut-off apertures¹⁰.



Fig.3 Calculated electron intensities in the stack composed of Si, Sb and Si layers whose thicknesses are 45, 10 and 45 Å, respectively. The calculations were performed at the defocuses of -100 Å (a), -80 Å (b), -60 Å (c), -40 Å (d), -20 Å (e) and 0 Å (f) ¹⁰.



Fig.4 Calculated electron intensities in the stack composed of Si, Sb and Si layers whose thicknesses are 45, 10 and 45 Å, respectively. The calculations were performed at the defocuses of -100 Å (a), -80 Å (b), -60 Å (c), -40 Å (d), -20 Å (e) and 0 Å (f) ¹⁰.

さは減少する。理想的には、その深さはデフォーカス の絶対値に一致するが、計算結果は少し小さな値を示 す。この現象はプレフォーカス効果として報告されて おり²⁴⁾、原子コラムにおけるポテンシャルと対物レン ズの球面収差が原因である。10 Å 程度の高い z 方向へ の分解能のため、Cs = 0.001 mm では、特定の試料深 さにおける断面 STEM 像を得ることが示唆される。

Fig.4に、 C_{s} = 0.001 mm において、様々なデフォー カスに対して計算した試料内の電子強度を示す。ただ し、STEM ビームの中心を、2 つの原子コラム間の中心 である x = 2.04 Å の位置においた。ここは原子コラム から最も離れた位置で、入射電子に対する原子ポテン シャルの影響が最も小さい。再隣接の原子コラム位置 は **x** = 0 と 4.07 Å である。電子強度分布は Fig. 3 と非 常に似ている。しかし、最大強度を示す深さは、Fig. 3 よりもデフォーカスの絶対値にわずかに近づいている。 これは、2 つの原子コラム間の中心でのポテンシャルが 原子コラム位置でのポテンシャルよりも小さいためで ある²⁴⁾。

Fig.5に、球面収差係数 $C_8 = 0.1 \text{ mm } (a) < 0.01 \text{ mm } (b)$ 、 0.001 mm (c)に対して計算を行った SiK、SbL 特性 X線 のラインスキャンシミュレーションを示す。(9)式にお ける n = 1 から 3 までの和をとることによって計算を 行った。横軸は[001]に沿ったプローブ位置を、縦軸は デフォーカスを示す。原子コラムは x = 0 と-1.36 Å



Coordinate along [001] direction (Å)

Fig.5 Probe line-scan simulation of SiK and SbL EDX signals in the stack composed of Si, Sb and Si layers whose thicknesses are 45, 10 and 45 Å, respectively $^{10)}$.



Fig.6 Calculated EDX STEM image simulations for [110] zone axis incidence at the defocuses of -100 Å (a), -80 Å (b), -60 Å (c), -40 Å (d), -20 Å (e) and 0 Å (f) with spherical aberration 0.001 mm and optimal cut-off aperture 2.40 Å^{-1 10)}.

に位置する。入射に垂直な方向の分解能は C_8 の減少と ともに向上している。縦軸に沿った SbL 線の強い領域 は C_8 の減少とともに小さくなっている。 $C_8 = 0.001$ mm (c) で SbL 線の強い領域は、Sb 層の厚さである 10 Å 程 度に達している。しかし、SbL 線の強い領域におけるデ フォーカスの絶対値はSb 層の位置する深さより大きく なっている。これは、Fig. 3 と Fig. 4 で示したプレフォ ーカス効果が原因である。 $C_8 = 0.001$ mm (c)において、 SbL 線の強い領域で SiK 線は減少している。

Fig. 6 に、 $C_{\rm S}$ = 0.001 mm において、様々なデフォー カスに対して計算した[110]軸上照射 EDX STEM シミュ レーション像を示す。像強度の最大値と最小値を各像 の下に示している。SiK 線の像においては、どのデフォ ーカスでも原子コラム位置に明るいスポットが高い分 解能で見られる。最も明るいスポットは Scherzer フォ ーカス付近の(d)、(e)で見られる。原子コラム位置で の SbL 線強度は、デフォーカス量に依存する。最も明 るいスポットは Δf =-60 Å で観察され、その絶対値は、 Fig. 5 (c)で見られるプレフォーカス効果のため、Sb 層位置よりも大きくなっている。これらの結果は、様々 なデフォーカスにおける STEM像のシミュレーションと 実験結果を比較することにより、定量的な 3 次元情報 を得ることができることを示唆する。

Fig.7に、*C*s = 0.001 mm で Sb 層の厚さを 40 Å (a)、 10 Å (b)、2 Å (c)と仮定して計算した SiK、SbL 特性 X 線のラインスキャンシミュレーションを示す。Sb 層は *z*方向に沿って Si-Sb-Si 試料の中心に位置すると仮定 している。縦軸に沿った SbL 線の強い領域は、(a)から



Fig.7 Probe line-scan simulation of SiK and SbL EDX signals in the stacks composed of Si, Sb and Si whose thicknesses are 30, 40 and 30 Å in (a), and 45, 10 and 45 Å in (b), and 49, 2 and 49 Å in (c), respectively. The calculations were performed for spherical aberration 0.001 mm and optimal cut-off aperture 2.40 Å^{-1 10}.

(b) へ Sb 層の厚さの減少とともに小さくなっている。 しかし、(c)における SbL 線の強い領域は(b)とほとん ど変わらない。これは、 $C_{\rm S} = 0.001$ mm における試料 厚さ方向の分解能の限界による。SiK 線の強度は、SbL 線の強い領域付近では減少しており、その領域は Sb 層 の厚さの減少とともに小さくなっている。

4. むすび

Allenらは、Bloch波法による新しいEELS、EDX、BSE、 HAADFのSTEM像シミュレーション法を開発した。これ らの検出法に対する散乱断面積の式を統一化し、式中 の非弾性散乱因子のみを変えることで、各検出法によ るSTEM像の計算を可能にした。本研究では、Allenら の手法を発展させ、析出物、欠陥、原子変位などの不 均質な構造を含む結晶に適用する方法を確立した。こ の手法をSi-Sb-Si積層試料に対して適用し、各層に おける対角化散乱行列の積によって計算を簡略化し た。入射電子強度の分布やEDXSTEM像を様々な条件 で計算した。STEM像のシミュレーションと実験結果を 比較することにより、定量的な3次元構造解析が可能 であることを示唆した。

参考文献

- Kirkland, E.J., Loane, R.F. and Silcox, J.: Simulation of annular dark field STEM images using a modified multislice method, *Ultramicroscopy*, Vol.23, pp. 77-96, 1987.
- Anderson, S.C., Birkeland, C.R., Antist, G.R. and Cockayne, D.J.H.: An approach to quantitative compositional profiling at near-atomic resolution using high-angle annular dark field imaging, *Ultramicroscopy*, Vol.69, pp. 83-103, 1997.
- Ishizuka, K.: A practical approach for STEM image simulation based on the FFT multislice method, *Ultramicroscopy*, Vol.90, pp. 71-83, 2002.
- Pennycook, S.J. and Jesson, D.E.: High-resolution Z-contrast imaging of crystals, *Ultramicroscopy*, Vol.37, pp. 14-38, 1991.
- Nellist, P.D. and Pennycook, S.J.: Incoherent imaging using dynamically scattered coherent electrons, *Ultramicroscopy*, Vol.78, pp. 111-124, 1999.
- Mitsuishi, K., Takeguchi, M., Toda, Y. and Furuya, K.: Layer-doubling method in ADF-STEM image simulation, *Ultramicroscopy*, Vol.96: pp. 323-333, 2003.
- 7) Yamazaki, T., Watanabe, K., Kuramochi, K. and

Hashimoto, I.: Exteded dynamical HAADF STEM image simulation using the Bloch-wave method, *Acta Cryst.* A, Vol.62, pp. 233-236, 2006.

- Allen, L.J., Findlay, S.D., Oxley, M.P. and Rossouw, C.J.: Lattice-resolution contrast from a focused coherent electron probe. Part I, *Ultramicroscopy*, Vol.96, pp. 47-63, 2003.
- Findlay, S.D., Allen, L.J., Oxley, M.P. and Rossouw, C.J.: Lattice-resolution contrast from a focused coherent electron probe. Part II, *Ultramicroscopy*, Vol.96, pp. 65-81, 2003.
- Morimura, T. and Hasaka, M.: Bloch-wave-based STEM image simulation with layer-by-layer representation, *Ultramicroscopy*, Vol.109, pp. 1203-1209, 2009.
- Morimura, T.: STEM image simulation by Bloch-wave method with layer-by-layer representation, *J. Electron Microsc.*, Vol.55, pp. 7-12, 2010.
- 12) van Benthem, K., Lupini, A.R., Kim, M., Baik, H.S., Doh, S., Lee, J.H., Oxley, M.P., Findlay, S.D., Allen, L.J., Luck, J.T. and Pennycook, S.J.: Three-dimensional imaging of individual hafnium atoms inside a semiconductor device, *Appl. Phys. Lett.*, Vol.87, pp. 034104-1-3, 2005.
- Borisevich, A.Y., Lupini, A.R. and Pennycook, S.J.: Depth sectioning with the aberration-corrected scanning transmission electron microscope., *Proc. Nat. Acad. Sci.*, Vol.103, pp. 3044-3048, 2006.
- 14) Borisevich, A.Y., Lupini, A.R., Travaglini, S. and Pennycook, S.J.: Depth sectioning of aligned crystals with the aberration-corrected scanning transmission electron microscope, *J. Electron Microscopy*, Vol.55, pp. 7-12, 2006.
- 15) D'Alfonso, A.J., Findlay, S.D., Oxley, M.P., Pennycook, S.J., van Benthem, K. and Allen, L.J.: Depth sectioning in scanning transmission electron microscopy based on core-loss spectroscopy, *Ultramicroscopy*, Vol.108, pp. 17-28, 2007.
- 16) Xin, H.L. and Muller, D.A.: Aberration-corrected ADF-STEM depth sectioning and prospects for reliable 3D imaging in S/TEM., *J. Electron Microscopy*, Vol.58, pp. 157-165, 2009.
- Rossouw, C.J., Allen, L.J., Findlay, S.D. and Oxley, M.P.: Channelling effects in atomic resolution STEM, *Ultramicroscopy* Vol.96, pp. 299-312, 2003.
- 18) Hirsch, P.B., Howie, A., Nicholson, R.B., Pashley, D.W.

and Whelan, M.J.: *Electron Microscopy of Thin Crystals*, Krieger Publishing Company, Malabar, Florida., 1977.

- 19) Doyle, P.A. and Turner, P.S.: Relativistic Hatree-Fock X-ray and Electron Scattering Factors, *Acta Cryst.* A, Vol.24, pp. 390-397, 1968.
- Humphreys, C.J. and Hirsch, P.B.: Absorption Parameters in Electron Diffraction Theory, *Philos. Mag.*, Vol.18, pp. 115-122, 1968.
- Rossouw, C.J., Forwood, C.T., Gibson, M.A. and Miller, P.R.: Generation and absorption of characteristic X-rays under dynamical electron diffraction conditions, *Micron*, Vol.28, pp. 125-137, 1997.
- 22) Oxley, M.P. and Allen, L.J.: Atomic scattering factors for *K*-shell and *L*-shell ionization by fast electrons, *Acta Cryst.* A, Vol.56, pp. 470-490, 2000.
- 23) Oxley, M.P. and Allen, L.J.: Atomic scattering factors for *K*-shell and *L*-shell electron energy-loss spectroscopy, *Acta Cryst.* A, Vol.57, pp. 713-728, 2001.
- 24) Cosgriff, E.C. and Nellist, P.D.: A Bloch wave analysis of optical sectioning in aberration-corrected STEM, *Ultramicroscopy*, Vol.107, pp. 626-634, 2007.